

## みちこそなけれおもひいる

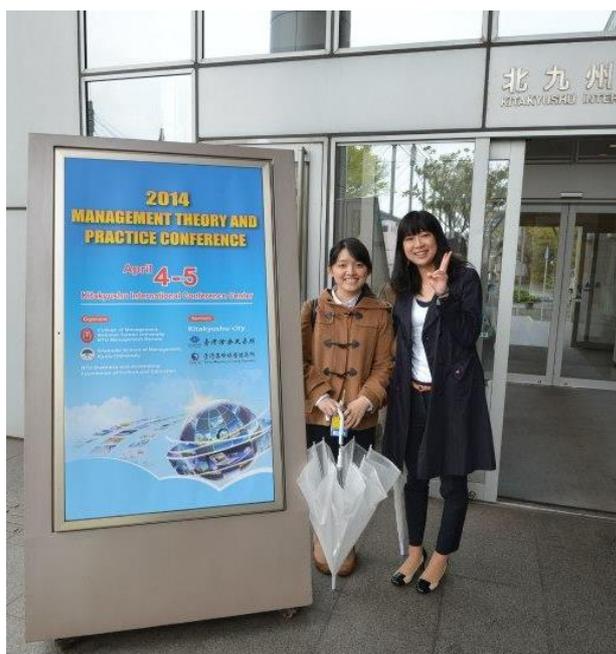
第7期 OG 菊盛 真衣

例年通り、百人一首タイトルシリーズということで、今年は百人一首の撰者である藤原定家の父である俊成が27歳の時に詠んだ“世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる”という歌を選びました。当時の27歳というのは、今でいう中年に差し掛かり、今後の人生をしっかりと考えていこうとする時期だったようです。その当時、俊成は、同年代の友人が俗世を捨てて次々と出家していくのを見て、自分はどう生きるべきかを様々に悩み、悩んでもどこへ行こうと悩みは尽きないし、この世の中には、悲しみや辛さから逃げる道などないのだなあと、そんな気持ちを詠んだそうです。

さて、悩みの絶えない人生を寂しげに詠み上げた俊成のように、私も27歳になりました。そんな27歳になった昨年は、たくさんの悩みの種に恵まれました。今年度、私は博士課程2年生になり、来年度の課程最終年を迎えるにあたり自分の研究を少しでも形にしようと、例年以上に論文を書いて投稿したり、学会発表にも積極的に挑戦したりしました。そして、自分の研究のかたわら、修士2年生の2人の留学生のチューターも務めさせてもらい、彼女たちに付きっきりで修論指導を行いました。以下では、2014年度のキクモリのココロのツイッターで人気だったリツイートのいくつかをご紹介します。

“マジヤバイ。シヌ。”——自分の論文の締切は次々迫ってくるし、学会準備には追われるし、そんな忙しい最中に支離滅裂な日本語で書かれた留学生の修論原稿が手渡されます。本心は、「自分のことだけで本当に精一杯！1ミリも余裕なんてない！」と叫んでいましたが、チューターを引き受けた手前、無責任に放っておくわけにもいきません。原稿を1ページ添削するだけであつという間に1時間が吹き飛んでいき、「キーンツ」とひと発狂。とにかく恐ろしいほど時間がかかりました。そんな私は完全にキャパオーバー状態で、「マジヤバイ。シヌ。」って少なくとも1万回はつぶやきました。堂々のRTランキング1位です。

“自分はとても頭の悪い大バカなのかもしれない。”——能力が低いせいで、効率よく添削は出来ないし、自分の研究にも思うように



北九州で開催された国際学会の会場にて、著者がチューター指導した邱さんと。(著者は右側)

時間を割けないのだと思い、自分のバカさを幾度も呪いました。小野先生は、三田論、卒論、修論、私の論文、それら含めて、とにかく恐ろしい量の論文を、サクサク、ゴリゴリ添削しています。そんな先生を日頃から見ている私は、「ヒョーッ！！」と心の中で叫びまくって目玉が飛び出しそうな気持ちになります。そして、自分が書いた論文を先生にひとたび添削していただくと、その原稿には大量の血の雨が！！はたまた私は、「ヒョーッ！！」と絶叫して、自分のバカさに愕然とするわけです。「ヒョーッ！！」はあくまで擬音語なので、つぶやきにはカウントしていません。

“こんなじゃ「センセイ」なんかになれないよ。”——依然として、私は、自分の論文1本すら満足な出来には書けない未熟者です。あと1年ちょっとで「センセイ」と呼ばれる仕事を本当にこなせるのか、小野先生のような先生に少しでも近づくことはできるのか、はっきり言

って全くもって自信がわかりません。「ビジョンが見えないじょ～！！」とは、まさにこのことです。そもそも、こんな未熟な自分が修論の指導に当たる資格なんてあるのだろうかと自問することも多々ありました。「センセイ」と呼ばれるにふさわしい人格も、自分には備わっているようには思えません。自分の無力さを思い知るほど、将来の自分が見えなくなりました。

“結婚とか出産とか真面目に考えなきゃバクね？”——女性の結婚平均年齢は、およそ29歳。正規分布の頂点目指して、ゼミの同期や高校の同級生が次々と、あれよあれよという間にゴールインしていきます。去年は、幸セイッパイ！！夢イッパイ！！な結婚式に呼ばれることも多かったです。まだ学生の自分には、結婚や子供なんてまだまだ遠い先のこと、なんて思っていまいち実感がわかないのも事実です。でも、迫りくる花の20代の終焉！！一生独身で、孤独死なんて絶対イヤ！！親に孫が欲しいと言われ、後輩に本当に結婚出来るの？といじられるたびに、ため息まじりに「マジでヤバクね？」とつぶやきながら、焦燥感に駆られています。



学会の際に訪れたマチュピチュにて、疲労が見える著者



小野先生とペルー・リマで開催された学会のディナーの席にて  
(著者は右から2番目)

といったかんで、悩みのつぶやきは絶えません。これからどこに就職して、どんな研究を精力的にして、どんな先生になって、どんなゼミを作って、どんな指導をして、何歳くらいで准教授になって、何歳くらいで教授になるんだろう？ もし結婚出来たら、出産はどのタイミングですればいいんだろう？ 留学には何歳くらいで行くんだろう？ そのとき、独身だったらどうしよう？ もし結婚していたら、相手は？ 子供がいたらどうする？ そもそも就職は



同期の氏田さんの幸セ IPPAI の結婚式披露宴にて(著者は右端)

ちゃんと出来るのだろうか？ 悩みの種は尽きません。他人には取るに足らないであろう悩みの数々に、いつの間にか埋もれそうになっているわけです。大学生の頃は、単位が足りるか、期末試験のノートは全部集められるか、夏休み旅行に行くにはどれくらいお金を貯めればいいのか、そんなことくらいしか考えていなかった気がするのに。

コドモを卒業しオトナになるにつれて、人はたくさんを知り、たくさんを背負わなければいけなくなるのでしょ。冒頭の和歌でも詠まれているように、どこに行っても悩みは尽きないし、その悲しみや苦しさから逃れる道などないのしょう。きっと私たちが年を重ねるほどに、悩みや戸惑いは増えていくのだと思います。孔子曰く、「不惑の四〇」らしいですが、う〜ん、私の場合、あと十数年でその境地には達せそうにはないですね。その頃も、今と大して変わらず、教え子のうだつがあがらなくて「キーッ」とか叫んでそうです。

確かに悩みは尽きないわけですが、私はいたって心身ともに健やかです。だって、『ONE PIECE』の冥王レイリーだって「戸惑いこそが人生だよ」と言ってくれていますし、『風と共に去りぬ』の主人公、不屈の女スカーレット・オハラも「明日は明日の風が吹く (Tomorrow is another day.)」と言ってくれていますし、映画『マグノリアの花たち』の涙なしには見れない名シーンでは、愛娘シェルビーを亡くしたお母さんも「それでも人生は続いていくのね (Life goes on.)」と言ってくれています。彼ら良いこと言うんですよ、本当に。勇気が湧いてきますね。ちなみに、追い詰められたときの私の口癖は、「まあ、なんとかなるっしょ!!!」です。そう言うと、本当になんとかなる気がして、というか、なんとかするしかないという気になって、自分の中の本気が呼び覚まされてきます。さて、恥ずかしながら今回は、自分の日頃の悩みをぶちまけてきたわけですが、心優しい皆様の中には、こんな私を心配してくださる方もいるかもしれません。飲み連れて行って励ましてやろうと思ってくださった方もいるかもしれません。ありがとうございます。喜んで励まされたいです。私と同じように、もしくはそれ以上の悩みを抱えているかもしれない読者の皆様、どうかその悩みに苦しみ過ぎることなく、健やかな日々を送られることを心よりお祈りしております。